2023 年 8 月第 11 号

生薬ニュース

近畿大学東洋医学研究所附属診療所調剤室

今月のピックアップ

呉茱萸（ごしゅゆ）

ゴシュユとは・・・

ゴシュユはミカン科の果実で、中国の貴州省、湖南省、雲南省、四川省など、日本では熊本県、鹿児島県、奈良県で少量ですが栽培されています。学名が数種あり、**ゴシュユ**も名称変更が最近行われました。

Euodia officinalis ：中国で生産されているゴシュユ
Euodia bodinieri ：中国で生産、日本にも入ってきているゴシュユ
Euodia ruticarpa ：日本で採れるゴシュユ

1775 年に Euodia と記載されたのが最初ですが、その後、1786 年に別の学者が Evodia で報告し、日本薬局方は後者に従い、Evodia と記載されていましたが、国際植物命名規約によれば、先発の命名が優先されますので、日本でも薬局方第十六改正（2011）より表記を Euodia に変更することとなりました。

ゴシュユの果実をよく見てみると、みかんを 5 mm程度に小さくしたような形状をしており（右写真参照）その匂いは特異で、味は強烈に苦辛いと言われます。私たちが調剤する際も、その独特なにおいが調剤室に充満しますので、部屋に入るとすぐに**ゴシュユ**を調剤していることがわかります。

【性味】 辛苦・熱　　【薬効】 散寒止痛・下気止嘔・疎肝下気

ゴシュユの成分と薬効・・・

ゴシュユに含まれる成分は、インドールアルカロイドのエボジアミン、ルテカルピン、キノロンアルカロイドのエボカルピン、その他の成分でヒゲナミン、シネフリンなどを含みます。後者のヒゲナミン、シネフリンについては、カテコールアミンに分類される成分で、強心作用があるため、心拍を強め、血流量を増やし、四肢の冷えを温める働きがあります。特にヒゲナミンは持続性、シネフリンは一過性の強心作用を示すので、この両者を含有している**ゴシュユ**にはその相乗作用が期待されます。ちなみにこのヒゲナミンは世界アンチドーピング機構（WADA）の禁止リストに収載されています。

ゴシュユを含む方剤・・・

ごしゅゆとう
呉茱萸湯（手足が冷えて、時にみぞおちが膨満したり、下痢するものの頭痛、胃痛に伴う吐き気、嘔吐、しゃっくり）

とうきしぎゃくかごしゅゆしょうきょうとう
当帰四逆加呉茱萸生姜湯（手足の冷えを感じ、下肢が冷えると下肢または下腹部が痛くなり冷えやすいものの、しもやけ、頭痛、下腹部痛、腰痛、冷え性、下痢）

うんけいとう
温経湯（手足がほてり、唇がかわくものの月経不順、月経困難、更年期障害、不眠、神経症）

薬効は、血流促進作用、他に、鎮痛、微弱な体温上昇、特に鎮痛は寒冷時に著しいことが報告されています。

ヒゲナミンを含むサプリ・・・

前述しました通り、**ゴシュユ**には『ヒゲナミン』という成分が含まれています。この成分は、1976 年にトリカブトの根から分離され、強心作用を持つ物質として同定されて以降、欧米ではサプリメントとして抗肥満およびパフォーマンス向上のために利用されてきました。オランダの研究によると、対象となった 416 のサプリメントのうち 28 製品がヒゲナミンを含んでおり、カフェイン、シネフリン（ゴシュユ含有）、シルデナフィル（バイアグラの成分）、イカリインに次いで多く検出された成分だったようです。

ゴシュユと六陳・・・

激しい作用、もしくは好ましくない作用をもつ成分を含む生薬は、収穫後すぐに使わず、1 年以上保管しておいて作用が緩和になったものを使います。こうした処置が必要な生薬が 6 種あり、これを『**六陳（ろくちん）**』と呼びます。六陳に含まれる生薬には諸説ありますが、枳殻*（きこく）、陳皮*（ちんぴ）、半夏（はんげ）、麻黄（まおう）、狼毒（ろうどく）、呉茱萸*（ごしゅゆ）の 6 種、とされることが多く、ミカン科（*）の生薬が 3 つも含まれています。中国では、陳皮は 20～30 年も保管していたものが高値で流通しているようです。

これとは逆に、生薬の使用部位が葉や花の場合は、『八新（はっしん）』といって、収穫後すぐに使用した方がいいとされる生薬もあります。紫蘇（しそ）、薄荷（はっか）、菊花（きくか）、桃花（とうか）、赤小豆（せきしょうず）、塊花（かいか）、沢蘭（たくらん）、款冬花（かんとうか）がこれに当たります。

また、『本草和解』という本には**ゴシュユ**の修治（しゅうち：生薬を蒸す、煮る、炒めるなどの加工をすることで副作用を軽減させる方法）として、熱湯に浸して 7 回もみ洗い、その後日に干して刻み生薬とする、とあるようですが、過度の修治が行われており本来必要な成分が残っていたのか気になるところですね。